



▲本番に向けて熱心に芝居の稽古をする団員たち

たがわ21女性会議

芽吹きはじめた「種」

日常生活のひとコマに潜む差別や偏見を、ユーモアあふれる創作劇で訴えている。演じるのは「たがわ21女性会議」の会員たちだ。「男女共同参画社会」という難しいテーマに挑んできた劇団。県内各地で公演を続け、反響を呼んでいる。



《たがわ21女性会議》

田川市郡の11団体と個人会員33人で組織し、男女共同参画社会を推進する市民団体。学習会、情報交換会などを開き、女性差別などの問題に取り組む一方、創作劇による啓発にも取り組んでいる。

種

「今の若いもんが何を考えちよるか全部わかつとる。時かんと生えん。当たり前のことつたい。わたしたちはその種を蒔ききらんやっただけのことよ。言うちやならんしちやならんと思いつたちや。女の性ちや悲しいよ。」

創作劇「時かんと生えん」のクライマックスの一節。姑が、嫁の陽子らの時こうとして、ある「種」のことで知り、自分の過去を振り返りながら嘆くセリフ。

イチゴ農家に嫁いだ陽子。毎日農作業に追われながら、家事を一切手伝わぬわがままな夫と遊びほうける姑の世話に、息つくひまもない生活。そんな陽子のもとに近所の農家の嫁たちが訪れる。くたびれ果てた陽子は悩みを打ち明

種

「家事を分担してほしい。週に一日の休みがほしい」。悩みを聞いた嫁の一人がいう。「男も女も平等に発言して、家の足元から見直さんことには世の中変わらんとするよ。」

「男女共同参画社会の実現」。陽子らは、その種をいつ、どこで、どうやって蒔くかを話し合うため、その晩開かれる農協の勉強会に出かけていく。

「いつ、どこで、どうやって種を蒔くか」。《たがわ21女性会議》は、そのひとつに「演劇」という手法を選んだ。

同会議は1992年に発足。女性の地位向上や男女共同参画社会の確立を訴える「女性フェスティバルたがわ」（ゆめっせフェスタの前身）や、学習会、情報交換会



なかはら ひろこ
中原 弘子さん (77歳)
たがわ21女性会議顧問。劇団発足時から脚本を手がける。元中学校教員。

を開き、田川地区の女性問題の取り組みをリードしてきた。その熱意は行政も動かした。1998年、女性問題の相談や研修を行い、女性団体の活動拠点となる行政窓口の設置を市に要望。市民会館内に「女性センター（男女共同参画センターの前身）」の設置を実現させた。

演劇を始めたのは、1996年。脚本を書くのは、同会議の発起人の一人である中原弘子さんだ。「先進地の大牟田や久留米に大きく遅れをとっていた」という女性問題への取り組み。遅れを取り戻すには、問題をかみ砕いて伝えることが必要、視覚に訴えることが近道だと考えていた。学生時代演劇部に在籍していた中原さんは、演劇で訴えることを会員たちに提案した。仲間たちの快諾。劇団はスタートラインに立った。

気づく女性になること

「職場ではお茶くみ。家庭では家事育児。女性は常に男性の後ろで控え目になっていることが美德とされてきた。そんな不条理に女性自身が気づいていなかった」と振り返る中原さん。演劇で訴えていくにはこれまで「当たり前とされてきたこと」のおかしさに、「ま

ず女性が気づくこと」が必要だと考えていた。

脚本には、田川市の大浦池にまつわる言い伝えを織り交ぜることにした。江戸時代、干ばつに悩まされた農民らが、池の底に女兒を人柱にたてて雨乞いをしたという話。人柱になるのは「なぜ女の子なのか」と疑問に感じていたからだという。

変化

女兒「お浦」の視点から過去の女性差別を見つめ、現代に舞台を移して問題を浮き彫りにする構成。女性差別に限らず、貧困差別、外国人差別、部落差別などおかしさと感じていたことを思うままに書きつづった。

芝居の稽古が始まった。現在同会議の代表を務める堀江昭美さんもメンバーに加わっていた。ともに教員だったころからの旧知の間柄。中原さん同様「当たり前とされてきたこと」に強い疑念を抱いていた一人だった。稽古を重ねるうちに、セリフを吟味する団員たちにある変化が生まれてきたことを感じたという。

「そのセリフ少しおかしいよ」「もつとこう言ったほうが伝わると思う」。団員たちの問題意識の芽生え。役に感情移入するにつれ、脚本に込められた思いや一つひとつの言葉に、これまで考えたこともなかった差別があったことに気づきはじめた。「みんなのセリフ回しがどんどん変わっていったんです」と堀江さんは振り返る。

その年、田川文化センターの初公演で好評を得た「お浦ものがたり」は、1999年、(財)福岡県女性財団などが主催する「あすばるフェスタ演劇まつり」でグランプリを受賞する。まず女性が気づくこと。中

小さな芽

「男女共同参画社会は、男女の性差を否定するものではないんです。男女がそれぞれの違いを認めあつて、お互いが人間らしく生きられる社会。女性が男性のように生きる社会のことじゃないんです」と話す中原さん。

問題を伝えていくこと、社会の意識を変えていくことが難しいことはわかってはいる。長く続いてきた男性中心の考え方は、今も社会に深く根を張っている。しかし、蒔いてきた「種」が、小さな芽を出しはじめていることも感じている。劇団の評判は口コミで広まり、県内遠方のイベントにも招かれ、公演の機会も増えてきた。反響も上々だ。

「花を咲かせて、実をつけるのを見届けるまでね。まだまだ続けていきますよ」。劇のキャラクターしながら、堀江さんの声は明るい。



ほりえ あけみ
堀江 昭美さん (69歳)
たがわ21女性会議代表。劇団発足当初からの団員。劇では主役を務めることも多い。元中学校教員。